

逆行

日照り続きの夏だった
全ての草木は石ころとなり果てた
地面を埃が這ってゆく
それでもひび割れは埋まらずじまい
何処までも、目を凝らしても
ひび割れの網の目だった

都会の詩神^{ミューズ}はいつでもそっけなく
喉が渴きっぱなし俺だから
こんなに遠く逃げては来たが
どうやらここでは俺の肺さえ
すっかりひび割れるだろ
口からは塵をばかり吐くだろ

アパートの部屋には隣りがあったが
ここでは隣りの音も聞こえない
ずい分と広い密室です
誰が言ったか、都会を砂漠と
きっとよほどの果報者
きっとよほどの楽道家

前見て歩けばよかったと
今では骨にも嘆願したいが
ここでは骨さえ砂と散る

指で地面に詩^{うた}を書いても
すっかり風が消してくれ
すっかり独りにしてくれる

すっかり独りに全てが要るとは
ちっともちっとも知らなんだ
今では爪噛むことさえも
すっかり俺の楽しみだとは
ちっともちっとも知らないんだ
とにかく進むほかはあるまいよ

(1982.3.29)